

【表1】背景：市町村立学校での受け入れ支援 ～ 学校での生活等

	高崎市教育委員会	高崎市金古南小学校（特別支援学級担任）	医療的ケア助士（看護師）
受け入れ準備	・学校で働く看護師を採用し、医療的ケアをはじめ他の助士と同様、教員のサポートや教室全体のケアを担当してもらった。	・入学にあたって、ユニバーサルシートや段差の解消など設備面の準備をした。 ・担任は特別支援学校からの転任。1年生から6年生まで担当。支援学校と小学校両方をわかったうえで、小学校の流れに沿って学校生活が送れるようにした。 ・肢体不自由クラスとしては1名。教室は知的クラスの児と一緒に。	
学校での生活	【母よりコメント】 申し送り・保護者待機は、入学式翌日の半日のみだった。 さりとてそういう対応をしてくれて、嬉しかった。 ・ケアの手技については、母から申し送りを受ける他、児を担当している訪問看護師にアドバイスもらった。（母の申し送り・待機は、入学式翌日の半日のみとした） ・学校の中での動きは病院で勤務する看護師とは異なるので、目的や学校で求められることなどを丁寧に説明した。 ・夏休み中に訪問看護師（医療的ケア児等コーディネーター）に講師を依頼し研修を実施した。	・授業に関してはその日の体調を一番に考え、医ケア助士と相談し、疲れている時は無理をせずゆっくり様子を見た。覚醒していて元気な時は積極的に活動に参加できるようにした。 ・なるべくみんなと一緒にというスタンス。その中でできること・難しいことを相談しながら行った。 ・小さいころは1日おきて2日眠るようなリズムがあった。つまらなくなると眠ってしまう。6年生時はほぼ起きていた。受け答えや発信も増えてきた。小学校で得られる刺激が合っていたのではないかと。 《就学旅行以前の校外学習について》 ・1年生から3年生まで：母と車で移動し、現地でみんなと一緒に過ごし、帰りも母の車で帰る方法で参加。 ・4年生：母もバスに乗って同行。カーシートを使用。 ・5年生（林間学校）：本児も母も、バスで移動。母と一緒に宿泊。部屋は本児も母と一緒に、他児童と同室。	・登校時体調の確認(バイタル測定) ・本人の様子を見ながら担任の先生と相談し授業参加や1日の予定を決める。気づいたこと、変わったことは適宜先生と共有。 《体位について》 ・授業参加時は座位保持椅子で過ごす。 ・本人の様子を見ながら、授業や活動を促したい時は椅子を立て、注入中や休息を取りたい時は少し寝かせるようにしてメリハリをつける。 ・安楽な姿勢と良肢位に気を付け側弯予防に努めた。 ・筋緊張が強い時、気持ちが落ち着かない時は、本人が一番安心できる抱っこの姿勢で過ごすこともある。 ・ベッドで過ごすこともある。 《医療的ケアについて》 ・指示書のもと胃ろうへの注入（1 0 : 0 0 ・ 1 2 : 0 0 ）が主。体位の確認やゆっくり注入する等、嘔吐予防に特に気を付けている。 ・日によって消化の差があるため、指示書に従い、その日の様子や予定に応じて必要量を注入したり、胃残が多い時は少し時間をずらすなど適宜対応。 ・嘔吐や高緊張に繋がる腹部膨満や便秘の時には、浣腸や軟便を実施。実施することもあった。 ・吸引は年に数回のみ。唾液の流出や少し痰が絡んでいる時は口腔内を確認しスポンジブラシで拭うなど。 ・高学年になってからは特に、排泄援助時や着替え時には周囲から見えないよう、羞恥心には特に気を遣って実施。 ・体温調節が苦手なため。服装や掛物、夏場は保冷剤、冬は湯たんぽなどを使用。 ・口腔の乾燥に対して、歯磨きやリップなど援助した。 ・マスクも着用。 《本人の様子》 ・不快なこと、嫌いな風が吹くと声や表情で教える。友達の声や先生のこと、学校が大好きで声や足音がすると音のする方へ向こうとするなどいろいろな成長を感じる。
他児童との関り		・子どもたちは一緒に過ごすことに戸惑いもあったが、同じ学校のお友達として日々を過ごしていて、いい意味で特別扱いしていない。 ・給食時間にクラスで胃ろうから注入することを事前に見せながら説明。 ・おしゃべりできない、歩けないけれど、聞こえていて、いろいろ考えていることを伝えた。園で本人を知っている子は他の子に説明する場面もあった。 ・他の児童も徐々に本人の表情からくみ取るようになった。心配してくれる子もいるので心配や不安がなくなるよう声掛け。	【母よりコメント】 先生たちも、そう思ってくれるのが嬉しい！ ・学校内では廊下や授業へ行くと学年問わずみんなが声をかけてくれて暖かい空気が流れていた。同級生にとっては本人がいることが当たり前のことで本人を通して自然と優しいインクルーシブになっていると感じた。 ・中学校でもいろいろな経験や出会い、交流を通して楽しい経験や気持ちを感じて欲しい。
工夫したこと、アドバイス等	・医ケアに関する協議の場において医療的ケア児等コーディネーターとの繋がりができ、就学前のある程度早い時期から情報把握ができることで動きやすくなっている。 ・学校で働く看護師は1人業務になることが多いのに経験者も少なく、日常的に相談できる人がいない。看護師だけでなく学校側もどんなことをしたらよいかわからない状況もある。これまでの経験を踏まえ、どの時期に何をするかなどの目安となるものを作成した。新規で医ケア児を受け入れる学校には流れの説明をしている。	・困ったこと、わからないことは母や助士さんに相談し、ひとつひとつクリアできるとよい。 ・最初は どう 接していいかわからなくてもちょっとした表情や動きを見て、気持ちを感じ取れるとよいと思う。 ・怖がらないで支援して欲しい。 【母よりコメント】 娘が地域の小学校で6年間楽しく過ごせたのは、学校の設備がバリアフリーだったということではありません。先生や子どもたち、保護者みんなの理解があったから、毎日笑顔で迎えてくれた優しさのおかげです。 どの学校でも、人とのつながりを作ることが、保護者の役割であり、障がいのある子の未来を拓く大事なきっかけだと思います。そして、私の手から娘の手が離れるときは、みんなの笑顔に囲まれている、そんな未来を夢見ています。	・助士が変わっても問題ないように記録を残し、助士間で共有。 ・年齢が上がると参加できる授業が減ってくる。学年問わず参加できるとよい。 ・地域の学校、特別支援学校どちらも良い面がある。地域で暮らす、インクルーシブを考えるなら、もっと他学年や協力学級などへ行きたいがしやすければよいと思う。 ・同じ疾患、年齢でも必要な支援、対応が違う。対象児さんに合わせた支援、やり過ぎないことも含めて必要な支援ができることが大切。 ・主体は児童さんと先生。病院とは違う生活の場でのケア。考えを押し付けず、場所に合わせた対応が必要。 ・一緒に授業を楽しむ気持ち。 ・先生と情報共有。医療者単独で判断、動かないこと。